

剣道専門部指導普及部の活動と今後の普及活動を考える

～ 底辺拡大にいかに取り組みか ～

埼玉県高等学校体育連盟剣道専門部

埼玉県立深谷商業高等学校 池田 忍

はじめに

平成 24 年、本専門部は選手の活躍で華々しくその幕を開けることができた。3 月に実施された「全国高等学校剣道選抜大会」において本県初となる男子団体戦で本庄第一高等学校が優勝を果たし、女子団体戦においても埼玉栄高等学校が準優勝の栄冠を獲得した。これらのことは、県内高等学校の剣道部員すべてに「やったことは必ず報われる」「厳しい稽古の先には全国が見える」という夢と希望をもたらすことになった。また、指導者も「埼玉一は全国一を獲れる」という大いなる希望を抱くことができた。日頃から強化に携わっている先生方の苦労もさることながら、それを支えている剣道専門部の各部担当者の連携があつてこそ成された偉業ともいえる。

1. 剣道人口と初心者が入部状況

毎年行われている「高等学校剣道部員人口調査」によれば、多少の増減はあるもののこの 10 年間の本県高校剣道部員は 2700 名前後で推移しており、全国においても五指に入る剣道人口を有している。県民の人口が 700 万という規模の県であるが、少子化傾向は他都道府県も同様と考えれば剣道先進県ということができよう。大半の剣道部員は小中学生から剣道教室や道場での経験者であるが、高校進学後に剣道部に入部する生徒も毎年約 150 名に達している。剣道はその競技性ゆえなかなか経験者には歯が立たないものである。しかしながら、二年生の中盤からその学校の主力選手として試合に出場する初心者選手も少なからず存在していることも事実である。未経験者が剣道を始める理由は、近年失われてきている「礼節」を重んじ相手を尊重する気持ちが養われること、体力はもとより忍耐力や精神的強さが身につけられることなどが考えられる。「くさい」「痛い」「暑い・寒い」との理由で授業においては不評をこうむりがちであるが、「道」を求める真摯な姿勢と技を獲得し、経験者に負けたくないという努力の過程に少なからず魅力を感じ、剣道を始めるのである。一方、多くの学校で「経験者の未入部」が増加していることも事実であり、その解決も課題のひとつである。

2. 段位取得と指導者の役割

剣道は高校入学後、早ければ 3 ヶ月で 1 級を取得することができ、初段も 1 級取得後 35 日を経れば受審が可能である。したがって、1 年次に初段を取得すれば、3 年次に二段を取得できる。剣道部の顧問はすべてが経験者ではなく、校務分掌の一部として顧問となっている先生も多い。そのようななか、剣道専門部指導普及部では指導法をはじめ審判法、日本剣道形、木刀による基本稽古法の指導者講習会を年 1 回開催し、その先生方の指導の支援を実施している。無論、年 1 回の講習会ではすべてを網羅することはできない。そこで決まりごとではないが、各支部・地域において高校の剣道専門家が近隣の中学校や専門の指導者のいない高校に声をかけ、同様の内容を定期的に行っている取り組みが挙げられる。その中心となっているのは、指導普及部に所属する常任委員・専門委員だけでなく剣道専門部に所属するすべての剣道専門家である。底辺の拡大と正しい剣道の普及に専門部一丸となって尽力している、といっても過言ではない。指導普及部の役割は多くの剣道専門家の手によって支えられているのである。このように総務・競技・強化・指導普及の各部の連携が非常にバランスよく機能しているのが本専門部の特徴である。その特徴がいかに発揮され、昇段審査の合格率も向上し、ひいては競技力の向上につながり、前述の全国優勝が実現したのである。たしかに、綺麗ごとばかりではない。学校間の選手の争奪戦もあれば、選手不足に悩む剣道伝統校もある。しかし、互いに生徒だけでなく指導者も切磋琢磨し、本県の高校剣道を盛り上げていこうという共通した気概もっているのもさらなる特徴といえよう。昇段審査や各大会の整然かつ熱気溢れる運営は、こういった指導

者の持つ意識が生徒にも浸透している結果である。指導者の姿勢がそのまま選手に鏡のように映るのが剣道の特性である。

3. 新たな試みとその効果

平成22年度より高校入学後剣道を始めた各高校の部員を対象とし、「剣道講習会・初心者大会」が指導普及部を中心に実施されるようになった。普段は試合出場機会の少ない初心者に試合の雰囲気味わわせ、試合時の所作動作を学ぶ場を設けることを目的としている。実施から2年を終え、参加生徒からは「初めて試合の経験をもっと強くなりたいと思った」「明日からの目標ができた」などの感想が寄せられ好評となっている。そればかりではなく、県大会の審判を経験していない指導者の先生方にもこの大会の審判・役員をお願いしたことにより、自らの審判技術も向上したとの声をいただいている。まだまだ端緒にすぎたばかりの取り組みであり、改善すべき点も多々意見として寄せられている。それらの声に耳を傾け、底辺の拡大と部員の定着、指導技術の向上に役立てるよう、今後も創意工夫をしながら続けていく方針である。

4. 中学校の武道必修化と底辺拡大

今般の学習指導要領において中学校における武道の必修化が始まった。県全体をみるとやや柔道を実施している中学校が多く見られるが、剣道同様指導者不足の声が上がっている。剣道は比較的武道の中でも受傷率の少ない競技である。剣道を選択した中学校では、剣道部員が指導者の補助的役割を担っていることは想像に難くない。また、新指導要領では各校種間の「接続」が強調されている。このような意味において、2項で述べた各支部・地域での中高合同稽古は先端を行く取り組みである。体育科教師だけが指導するシステムから、有段者の他教科の教師が指導できるようなシステムは構築できないであろうか。外部指導者というシステムを否定するわけではないが、生徒を知っている他教科の教師が教えるという教育的効果を考えると一考に値するのではないだろうか。部活動において多くの「接続」がされているのであるから、本腰を入れ具体的な方策を高体連研究部として示すことは不可能であろうか。もし実現をすることができたならば、中学校の授業をきっかけに高校入学後、本格的に剣道をやりたいと思う中学生も増加すると考えられる。正しく楽しい剣道の経験をすることにより、部活動を越えた教育的意義も得られれば、本県教育に寄与することとなり、高校剣道も発展していく可能性を秘めている。勝負もまた剣道である。しかるに剣道が続けることによって、人間の人生そのものを支える何かを学ぶことができるのも剣道である。授業と部活動の枠組みを見直し、人間教育として「剣道」を学ばせ、人として正しく生きることを学び実践する、それがまさに現代社会において求められていることである。

おわりに

剣道の指導普及という観点から論を進めてきた。最後は飛躍した論となってしまった。しなしながら、大局的視点から剣道の目指すものは何かを突き詰めていくと突拍子のない考え方ではないと思う。校種や部活動・授業の枠組みを外し、考えてみたい指導普及のあり方ともいえるのではないだろうか。加速する少子高齢化時代を支えていくのは、目の前の生徒達である。「親孝行、それは一人で生きること」という中学生の標語を目にしたことがある。懐古主義ではなく、日本人の本来備えている思いやりや長幼の序などの徳性を育て、活かすためにも武道の普及は不可欠である。近い将来日本を背負って立つ青少年の育成に武道教育がその一助になれば、との思いである。